

Utsunomiya Museum of Art These Dreams of Times

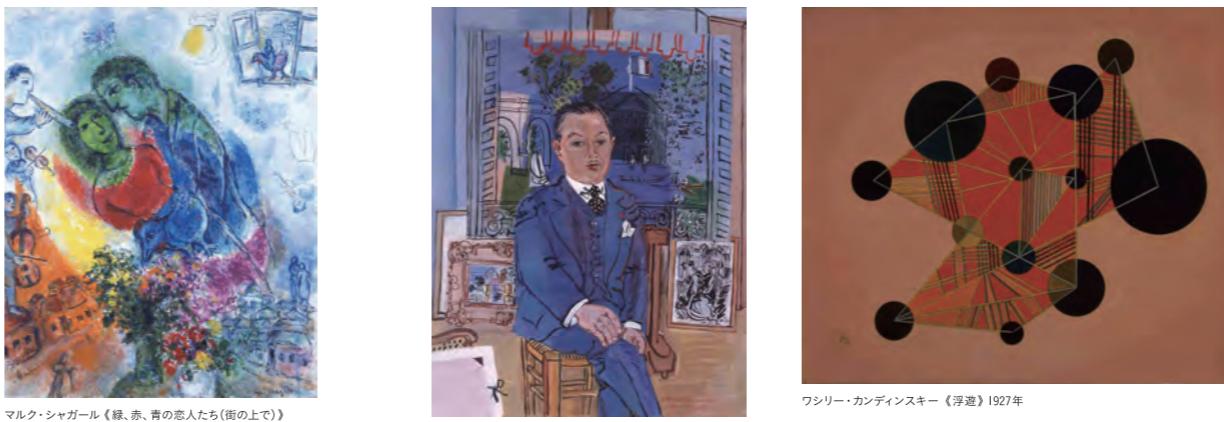


本展覧会は、25周年を迎えた当館の歴史をまとめた年譜と共に、準備室時代の資料などを展示する空間から始まります。続く展示室Ⅰでは、残された資料を基に、1997年の第1回コレクション展の再現を行います。図鑑の1ページのように、作品を見るために純化されたホワイトキューブにおける再現展示は、さながら25年前へのタイムスリップとなることでしょう。

続いて来場者が目にするのは、「時間」という目に見えないものに色と形を与えることで、時計やカレンダーとなったデザイン作品です。風景画を中心としたコーナーでは、山並みなど不变的な光景を捉えた作品群が一堂に会します。さらに、本展は、世界が戦争の恐怖に包まれた1919-1943年の25年に制作された日本とドイツの作品群を集めたコーナー、当館のコレクションの代表的な作家であるマルク・シャガールの生涯を追う特集へと続きます。

さて、上記の当館の歩みとコレクション作品の紹介が、当館の「これまで」であるとしたら、「これから」を見せるのは、3名の招聘アーティストの作品です。大巻伸嗣は、その代表作の1つ、岩絵具によって花々を描き出す作品『Echoes-Infinity』シリーズの新作を制作します。大巻はこのシリーズで、花柄や伝統的な文様を用いて、私たちの文化や記憶を鮮やかに描き出し、それらを見つめなおす空間を作り出しました。今回、外光が差し込む吹き抜けのホールに現れる新作は、美術館のある森と調和し、美しく詩的な考索へと鑑賞者を誘います。高橋銃は、美術作品の保存と活用のジレンマを鋭く提示し話題となった映像作品『二羽のウサギ』に加え、当館での下見から着想した写真の新作を手掛けます。力石咲は、これまでベンチ、建物、樹木などを色鮮やかな毛糸で編み包む作品を発表してきました。今回は、編む行為によってつなぐというテーマを深化させ、糸をほどく事に意味を持たせる新作を構想しています。彼／彼女たちの作品は、コレクションや宇都宮美術館の歴史に新たな視点をもたらし、鑑賞者を美術作品と時間をめぐる深い思索へと導くこととなるでしょう。

宇都宮美術館は、20世紀以降の美術・デザイン作品を中心に約6,800点の作品を収蔵しています。例年3回コレクション展を開催し、様々な切口を設けて作品を展示し、その魅力を紹介しています。本展は、開館25周年の記念事業として、1997年の開館から、現在に至るまで当館が収蔵した名品200点あまりを「時間」というテーマで、多角的に紹介します。また、特別展示として、大巻伸嗣、高橋銃、力石咲の現役アーティスト3名が本展のための新作を発表します。



出品予定作家

【コレクション作品】

荒井孝、五百城文哉、猪熊弦一郎、上野山清貴、海老原喜之助、恩地孝四郎、亀倉雄策、川上澄生、川島理一郎、佐藤時啓、里見勝蔵、里見宗次、杉浦非水、高橋由一、辰野登恵子、谷中安規、ラウル・デュフィ、難波田龍起、灰野文一郎、パウル・クレー、長谷川利行、ベーター・ベーレンス、松本俊介、松本哲男、マルク・シャガール、やなぎみわ、山田正亮、吉原治良、米陀寛、ルネ・マグリット、ワシリー・カンдин斯基 他

【特別展示】



大巻伸嗣《おおまき・しんじ》
<http://www.shinjiohshim.net/>

「存在」とは何かをテーマに制作活動を展開する。環境や他者といった外界と、記憶や意識などの内界、その境界である身体の関係性を探り、三者の間で揺れ動く、曖昧で捉えどころのない「存在」に迫るために身体的時間の創出を試みる。主な個展に、「存在のざわめき」(関渡美術館/台北、2020)、「まなざしのゆくえ」(ちひろ美術館、2018)、「Liminal Air Fluctuation-existence」(Hermèsセザーヴル店/パリ、2015)、「MOMENTAND ETERNITY」(Third Floor-Hermès/シンガポール、2012)、「存在の証明」(箱根彫刻の森美術館、2012)、「ECHOES-INFINITY」(資生堂ギャラリー、2005)など。あいちトリエンナーレ(2016)、越後妻有アートトリエンナーレ(2014-)、アジアパン・アート・フェスティバル(2009)、横浜トリエンナーレ(2008)などの国際展にも多数参加。近年は、「freeplus×HEBE×ShinjiOhmaki」(興業太古匯/上海、2019)、横浜ダンスコレクション「Futuristic Space」(横浜赤レンガ倉庫、2019)、「Louis Vuitton 2016-17 FW PARIS MEN'S COLLECTION」(アドレシトロエン公園/パリ、2016)などパフォーマンス作品も多く展開する。東京ガーデンブレイス紀尾井町、IJst(オランダ)、Morpheus hotel at City of Dreams(マカオ)、高松港(香川)などパブリックアートも多く手がけている。



高橋銃(たかし・せん)
<https://leesaya.jp/artists/sentakahashi/>
1992年東京生まれ、東京在住。2021年、東京芸術大学美術研究科彫刻専攻修了。
彫刻表現に要する技術を鍛い、映像作品やインスタレーション、食用の飴や香油など、様々な素材の持つ特性を最大限活かし、作品制作に意欲的に取り組む。これまでの主な展覧会に「二羽のウサギ/Between two stools」(The 5th Floor / 東京、2020)、「Sustainable Sculpture」(KOMAGOME SOKO / 東京、2020)、「CAST AND ROT」(LEESAYA / 東京、2021)。



力石咲(ちからいし・さき)
<https://www.muknit.com/>

1982年埼玉生まれ。多摩美術大学美術学部情報デザイン学科卒業。
編む、解くという行為によって一本の糸が変容していく織物の特性を、人生や自然現象、物事の成り立ちなどと重ね合わせながら制作している。近年の展示に「MIND TRAIL 奥大和 心の中の美術館」(奈良県奥大和エリア/2020-2021)、「道後オンセナート2022」(愛媛県道後温泉地区/2022)など。

